

## ◆ 今週のコメント

- 腸管出血性大腸菌感染症の報告が1例(女性, 20歳代)で, 型別はO157(VT1VT2)です。本年の累積報告数は30例となっています。詳細は下記ホームページを御覧ください。  
○京都市感染症情報センターホームページ「腸管出血性大腸菌感染症発生状況」  
<http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000068305.html>
- レジオネラ症(肺炎型)の報告が, 1例(女性, 80歳代)あり, 症状は発熱, 呼吸困難, 肺炎です。レジオネラ肺炎は, 乳幼児や高齢者, 闘病中で抵抗力が低下している人や, 健康人でも疲労等で体力が落ちている時に発病しやすい為, 注意が必要です。
- カルバペネム耐性腸内細菌感染症の報告が1例(男性, 60歳代)あります。平成26年9月19日から五類感染症(全数把握感染症)に追加されて以降, 累積報告数は3例となっています。

## ◆ 今週のトピックス: <感染性胃腸炎>

感染性胃腸炎の定点当たり報告数は5.39(221例)で, 先週に引き続き本市の過去5年平均値を上回る報告数となっています。詳細をトピックスに掲載しています。

## ◆ 発生状況

### 全数把握の感染症

- 三類: 腸管出血性大腸菌感染症 2例(第44週追加分含む)【1月以降の累積報告数 30例】
- 四類: レジオネラ症(肺炎型) 1例【1月以降の累積報告数 12例】
- 五類: アメーバ赤痢(腸管アメーバ症) 1例(第44週追加分)【1月以降の累積報告数 15例】
- 五類: カルバペネム耐性腸内細菌感染症 2例(第44週追加分含む)【1月以降の累積報告数 3例】
- 五類: 侵襲性肺炎球菌感染症 1例(第44週追加分)【1月以降の累積報告数 31例】

### 定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

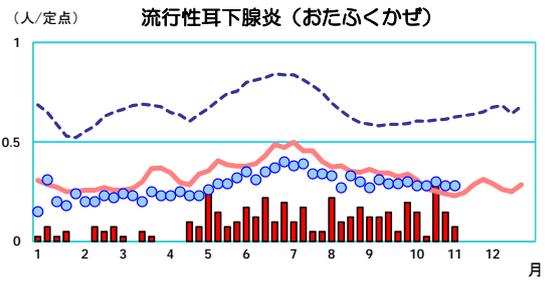
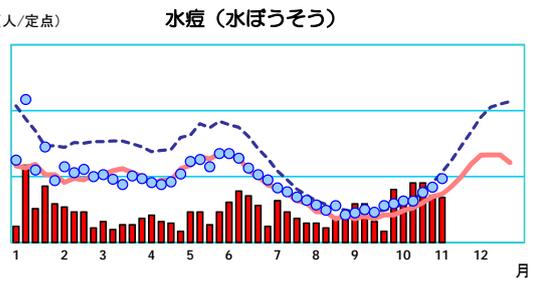
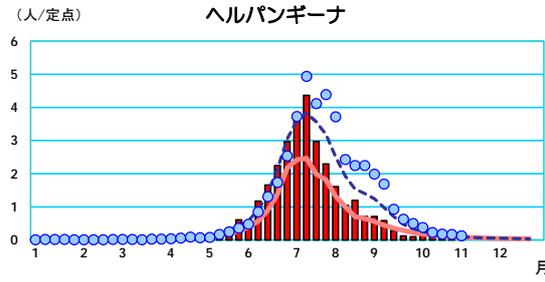
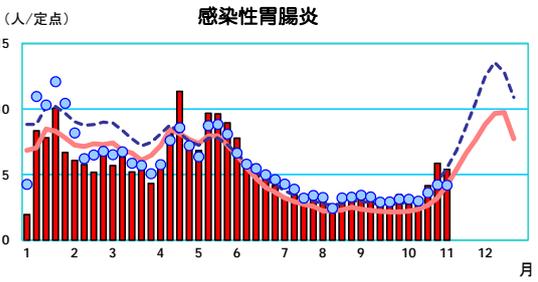
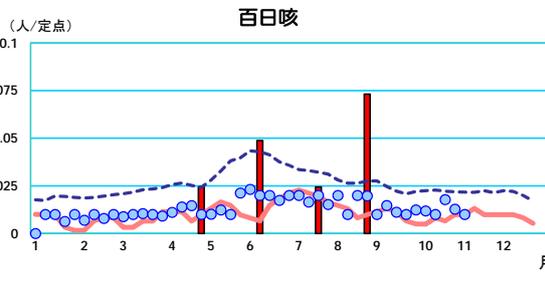
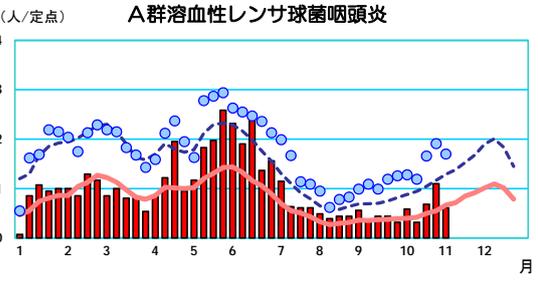
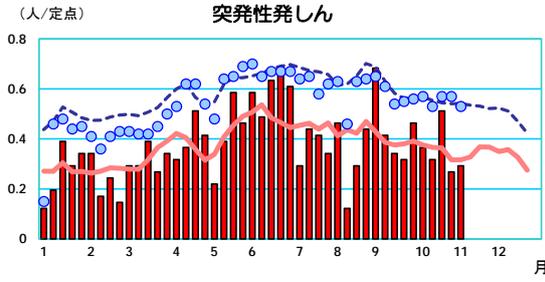
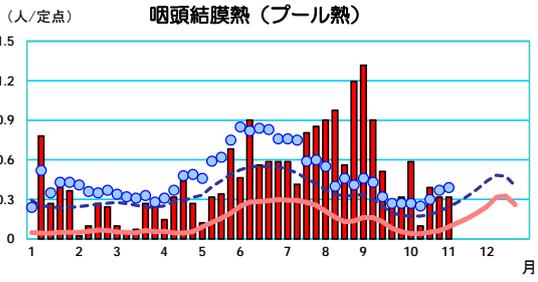
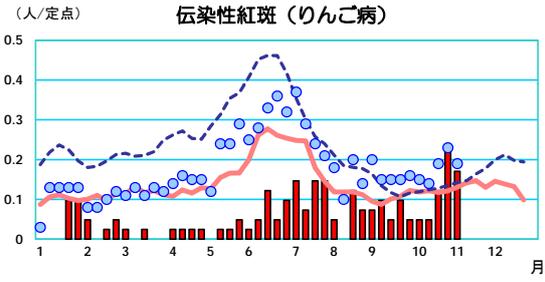
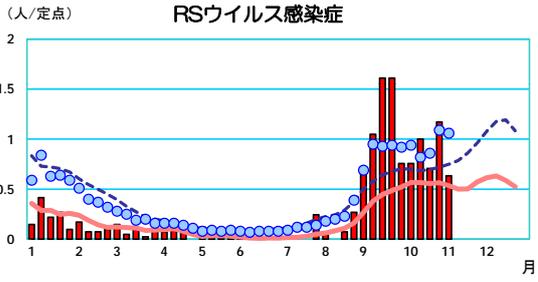
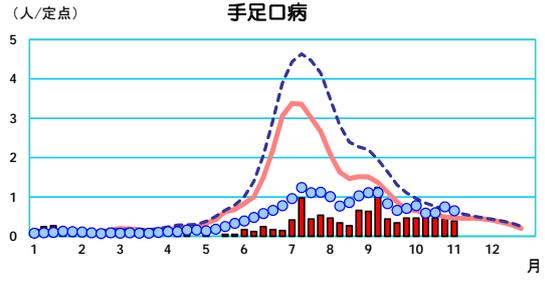
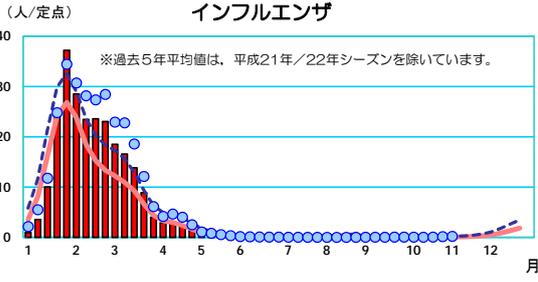
定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	0.04	3
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	5.39	221
	② 水痘	0.68	28
	③ RSウイルス感染症	0.63	26
	④ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.61	25
	⑤ 手足口病	0.39	16
眼科	流行性角結膜炎	0.10	1

## 【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <感染性胃腸炎>

(注) 京都市のデータは, 平成26年11月13日現在の報告数で, 全国の還元データと若干異なる場合があります。  
また, 本情報での患者数は, 届出医療機関所在地での集計で, 患者の住所を示すものではありません。

# ヘルパンギーナ及び小児感染症の疾病別推移グラフ（平成26年）



## 第45週(11月3日～11月9日)トピックス: <感染性胃腸炎>

感染性胃腸炎の定点当たり報告数は5.39(221例)で、先週に引き続き本市の過去5年平均値を上回る報告数となっています。

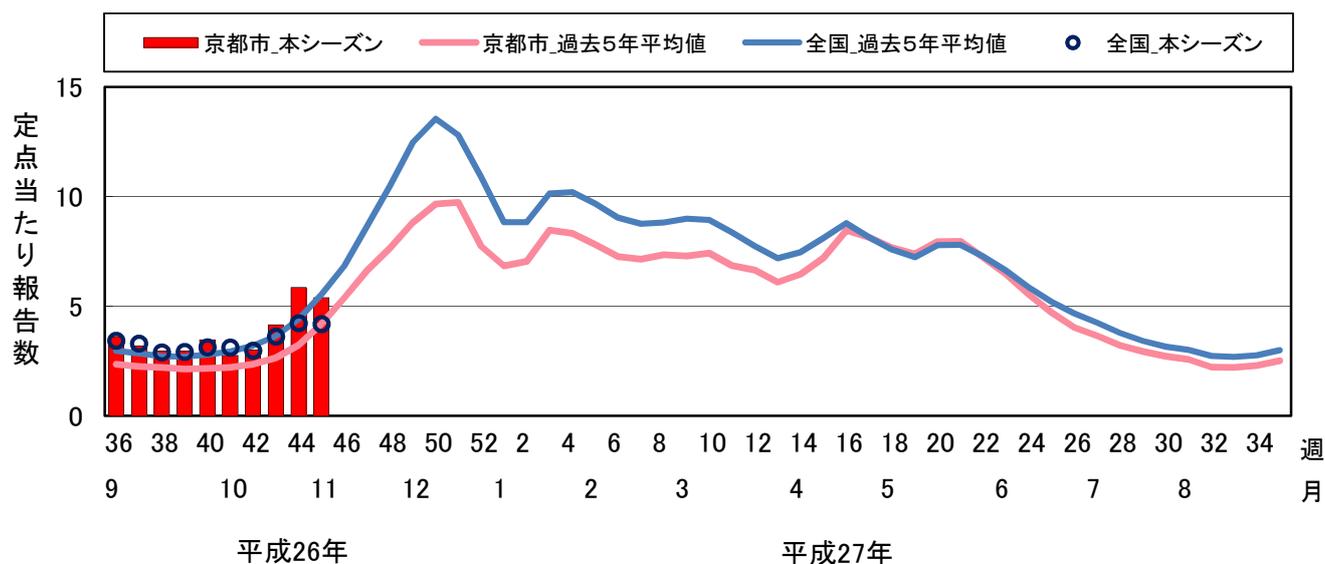
感染性胃腸炎は多種多様な原因によるものを含めた症候群名です。冬季に患者発生報告数が増加し、原因の大半はノロウイルスやロタウイルス等のウイルス感染であると推測されます。また、患者発生のピークは例年12月中に現れ、主な原因はノロウイルスによるものであると考えられています。

ノロウイルス感染症の潜伏期間は数時間～数日(平均1～2日)で、主な症状は嘔気、嘔吐及び下痢であり、嘔吐、下痢は1日数回から多いときには10回以上のこともあります。しかし、症状持続期間は数時間～数日(平均1～2日)と比較的短く、以前から他の病気がある等の要因がない限り、重症化して長期にわたり入院を要することはまれです。特効薬はなく、治療は対症療法となりますが、最も重要なことは水分補給によって脱水を防ぐことです。

ノロウイルスの感染経路としては、以前は食中毒としての経口感染がよく知られていましたが、感染後の発症者や無症状病原体保有者との直接又は間接的接触による接触感染や、患者の嘔吐物や下痢便を介した飛沫感染等のヒト-ヒト感染があります。感染力が非常に強いノロウイルスの感染予防には、流水、石けんによる手洗いの励行と吐物や下痢便の適切な処理が極めて重要です。

感染性胃腸炎の報告数は11月に入ると急増し、初冬の頃にそのピークを迎えるという流行を例年繰り返しています。本年も本格的な流行時期が近付いてきていることが予想されることから、今後の感染性胃腸炎の発生動向には注意が必要です。

京都市及び全国の定点当たり報告数の推移



過去5シーズンの流行状況(京都市)

